

## ジョン・ウェスリの牧会者論<sup>1</sup>

——*An Address to the Clergy* をめぐって——

小暮智久

### I. はじめに

ジョン・ウェスリ（1703～1791）は、英国国教会司祭として、「牧会者とは何か」というテーマについて、どのように考えを深め、どのようなことを述べているか。そして、現代の日本の教会は、そこから何を、どう学べるであろうか。

筆者がこのことに関心を深めた動機は、牧師としての自分自身の息切れや行き詰まりの経験である。その一因は、筆者自身の「牧師」という存在についての理解の浅さや、教会に集う様々な人との関わり方の未熟さ、牧師が必要とする自分自身に対する「牧会ケア」についての認識不足にあったと考える。この考察が、次代の牧師たちや、これから献身を考える人々のための一助になればと願っている。

研究の方法としては、ウェスリ自身が牧会者論に触れている文書（説教、論文、手紙など）に聴くことが考えられよう。本論文では、ウェスリの論文 *An Address to the Clergy*（「牧師たちに寄す」1756年）を取り上げ、この著作に至るまでのウェスリの牧会者としての形成過程を第1次資料（日記や手紙）や第2次資料から追う。

---

<sup>1</sup> 本論文は日本ウエスレー・メソジスト学会（2010年9月13日、日本基督教団銀座教会）での小研究発表を、加筆修正したものである。

## II. 本論

### 1. “An Address to the Clergy” について

この著作<sup>2</sup>は、1756年2月6日にロンドンで執筆、出版された。邦訳は「牧師たちに寄す」<sup>3</sup>がある。

#### (1) タイトルとそこから見えること

Address とは何か。現代英語では「演説」「式辞」と訳される。この著作は、‘Brethren and Fathers,’ という呼びかけで始まっており、論文というよりは講演と言えるような体裁である。

Clergy とは誰か。現代英語では「聖職者」「牧師」を意味しており、英国では「国教会だけに用いる」と用語とされている。「私の第一の企図は、まず我が教会の牧師だけ(Clergy of our own Church only)に対して、私のいささか思う所を率直に披瀝することである」<sup>4</sup>とあり、ウェスリは英国国教会の司祭たちをまず念頭においていた。また、「本来は私と直接関係をもつ者に語るとは言え、しかも尚何派の人にもあれ(whatsoever denomination)」<sup>5</sup>とあるので、英国国教会司祭だけでなく、他派の牧師たちをも対象としていると言える。この Address の邦訳で「牧師」と訳されている用語は Minister<sup>6</sup>、Clergyman<sup>7</sup>などで、英国国教会の司祭のみならず非国教会の牧師をも含んでいるであろうし、‘pastoral character」<sup>8</sup>という表現も見い出せる。したがって、この文書は、ウェスリによる英国国教会の司祭論というだけにとどまらず、他教派の牧師をも対象とした牧師論、牧会

---

<sup>2</sup> *The Works of John Wesley*, 3<sup>rd</sup> ed. Vol.10., pp.480-500. (Hendrickson Publishers, 1986., 以下 Works と表記) *The Works of John Wesley. Bicentennial Edition* (以下 BE works と表記) では未刊行である。

<sup>3</sup> 「ジョン・ウェスレイ 説教・論文・書簡」(松本卓夫・草間信雄共訳, 新生堂, 1929年), pp.286-335.

<sup>4</sup> Works., vol.10, p.481.

<sup>5</sup> Works, vol.10, p.481.

<sup>6</sup> Works, vol.10, p.481, 483.

<sup>7</sup> Works, vol.10, p.484, 499.

<sup>8</sup> Works, vol.10, p.499, 邦訳「牧師らしき品性」

者論の一つと言えるのではないか。

(2) その内容

それは次の2つの点、「牧師とはどのような者であるべきか」という点と、「我らはそのような者であるか否か」という点から成る。

第1点について、ウェスリは、まず生来の賜物として、

- ①よき悟性 (a good understanding) と明快な理解 (a clear apprehension) と健全な判断 (a sound judgment) と緻密に論じる能力 (a capacity of reasoning with some closeness)、
- ②思考が生き生きして、打てば響くこと (some liveliness and readiness of thought)、
- ③よい記憶力 (a good memory) を持つべきであると述べる<sup>9</sup>。

次に後天的能力として、

- ①自らの職務が何であるかの理解、
  - ②聖書全体の知識、
  - ③聖書原語の知識、
  - ④世界の歴史の知識、古代の風習や年代学、地理学の知識、
  - ⑤科学の知識、特に論理学、形而上学、自然哲学、幾何学、
  - ⑥教父に関する知識(特にニケア会議以前、クリソストモス、バシレイオス、ヒエロニムス、アウグスティヌス、シリアのエフライム)、
  - ⑦この世の知識、人間に関する知識、人間の格言や態度、性質などに関する知識、霊を識別すること、
  - ⑧賢明さと常識、
  - ⑨礼儀 (good breeding, propriety of behaviour)、平静 (easiness)、「紳士としての礼儀 (all the courtesy of a gentleman) と学者としての正確さ (the correctness of a scholar) を兼備 (joined) すべき」であると述べ<sup>10</sup>、
- さらに神の恵みによって、
- ①意志においては、神の栄光の為に魂を死から救うことに集中すること、

---

<sup>9</sup> Works, vol.10, pp.481-482.

<sup>10</sup> Works, vol.10, pp.482-485.

②感情においては、神と人とを愛する優れて豊かな愛、

③実践においては、群れの模範、聖く高き性質の模範、その全生涯は愛の労苦と、神への讃美と、人を助けることと、感謝と善行の連なりであり、謙遜にして真摯、柔和にして寛容、忍耐深く節制の人であるべきであり、神と共に働く者である御子のごとき者であるべきだと述べている<sup>11</sup>。

そして、この Address の後半では、第2点について、自分たちがそのような者か否かを、第1点と同じぐらいのスペースを割いて具体的に吟味している。

### (3) 父サミュエルの著作との比較

ジョン・ウェスリは、この“An Address to the Clergy”を、父サミュエルの“Advice to a Young Clergyman”という著作をもとにして書いた<sup>12</sup>。そして、Gordon Rupp は、このサミュエルの“Advice to a Young Clergyman”について「現代の決定版と言える、非常に驚くべき文書である」と高く評価しており、ジョンの“An Address to the Clergy”との関連を論じているのは興味深い<sup>13</sup>。

サミュエルはこの著作で、牧師が学ぶ領域とは、まず聖書の言語と聖書であり、当時は世俗的な学びとして軽蔑されていた論理学、歴史学、法律、薬学、自然・経験哲学、年代学、数学、詩、音楽であると述べている<sup>14</sup>。これはジョンが“An Address to the Clergy”で広範囲な学びの必要を述べていることと共通し、父の影響を受けていることは明らかである。それは、当時の英国国教会司祭に一般的であった聖書と教会教父の学びよりもはるかに広く、一般教養とすべき領域であり、ジョン・ウェスリは英国国教会の伝統を引き継ぎつつ、父をモデルとして独自の牧会者論を展開したと言えるであろう。

---

<sup>11</sup> Works, vol.10, pp.486-488

<sup>12</sup> 岩本助成「ジョン・ウェズリとその両親」『神学と人文』第23集（大阪基督教短期大学紀要,1981年）, p.122

<sup>13</sup> Gordon Rupp, “Son of Samuel: John Wesley, Church of England Man”, *The Place of Wesley in the Christian tradition*, ed. K.E. Rowe, The Scarecrow Press, 1976, p.44  
なお、サミュエルのこの著作は、Thomas Jackson’s *The Life of the Rev. Charles Wesley* (London: John Mason, 1841), vol.2, pp.500-534 に appendix として再版されている。

<sup>14</sup> Gordon Rupp, 前掲書 ,p44.

ウェスリは、牧師は聖書の知識だけでなく、論理学など幅広い知識を身につけるべきとし、特にこの世の知識、多種多様な人間に処するための人間に関する知識の必要性を説いた。また、紳士としての礼儀と、学者としての正確さを兼備すべきであるとした。つまり、聖書か科学か、信仰か常識か、礼儀か知識かの二者択一ではなく、両者を結びつけて身につけるようにという主張は、現代の複雑な社会における牧会者にも意義深いのではないだろうか。

また、ウェスリは、「私は自身の務めを理解して居るであろうか。自己の品性について、神の聖前に深く思い巡らしたことがあるであろうか」<sup>15</sup>と、自らと牧師たちに問いかけている。これは、当時の牧会者に対するウェスリの「牧会ケア」の実例と言える。ウェスリはこの Address において、「我らはどうであろうか」という問いかけを非常に多く用いて、当時の牧会者との「対話」を試みており、このような「対話」による牧会者相互のケアや交わりのあり方から、今日の教会が学び取れるものは非常に豊かではなかろうか。

## 2. この著作に至るまでの牧会者ウェスリの形成過程

### (1) 司祭補となる (1725 年 9 月 19 日) 前後から

司祭の按手を受ける (1728 年 9 月 22 日) まで

父サミュエルからジョンに宛てた手紙<sup>16</sup>や、ジョンが母スザンナにあてた手紙<sup>17</sup>などから、ジョンにとって司祭になる過程とは、その動機を探られ、自分の救いの確証を求め、そのために必要な謙遜 (humility) を求める過程であったと推察される。ジョンにとって「牧会」とは、神と自分との関係、そのもとでの自分と他者との関係における誠実や謙遜が問われ、深められていくことの延長線上にあることであり、ジョンにとって牧会を担う「牧師」とは、まず自分の魂についての内省と配慮からその働きを始める存在だったのではないか。

### (2) ジョージア伝道 (1736 年 2 月 6 日～1737 年 12 月 22 日)から

オールダースゲイト経験 (1738 年 5 月 24 日)まで

<sup>15</sup> Works, vol.10, p.491.

<sup>16</sup> 1724/25 (?) .1.26, Letters I, BE Works, vol.25, pp.157-158.

<sup>17</sup> 1725.6.18, Letters I, BE Works, vol.25, p.170.

ジョン・ウェスリが母に宛てた手紙<sup>18</sup>や弟チャールズへの手紙<sup>19</sup>、年上でジョージア伝道をウェスリに要請した人物ジョン・バートンに宛てた手紙<sup>20</sup>などから明らかになることは、ウェスリにとって牧会者とは、ひとりひとりの魂の、神を知り愛するという holiness の進歩のために見張り、骨折り、祈ることをやめない人であるということである。しかも、その働きの無限の広がりを実感すればするほど、すべてを自分だけで背負い込んで孤立してしまう危険もある中で、ウェスリは孤立しなかった。ジョージアからの手紙のやりとりでもわかるように、彼は家族や友との情報交換や心の交流を絶やさず、祈ってもらうという交わりが必要であることを、自らも意識していたのである。

ウェスリはジョージアからの帰国後、1738年3月5日にモラビア派のペーター・ベラーとの会話で、人々を永遠の救いに導く信仰が自らに欠けていることに気づき、信仰のない自分がどうして他の者に説教ができるのかと自分に問う<sup>21</sup>。「ここで再びウェスレーの中に、自分自身の救いと他の者を救うこと、自分の魂のためと隣人の魂のために関心を持つこと、この二つが離すことができないように絶えず互いに結び合っていた」とシュミットは指摘する<sup>22</sup>。この時点でウェスリにとって牧会者とは、自分の魂と他者の魂への両方向に関心と配慮を向ける者であった。

### (3)メソジストの指導者として(1740年代以降)

「班会 (Band) または組会 (Class) →会 (Society) →巡回区 (Circuit) および四半期会」という組織と、それぞれの指導者 (組会長、ヘルパー、アシスタントなど) のメソジストの制度は、1749年ごろにはほぼ整えられる<sup>23</sup>。すべての巡回区がウェスリに結びつくこの組織はコネクションリズム (Connexionalism)と呼ばれるが、それはウェスリの組織論というよりは、伝道

---

<sup>18</sup> 1736.3.18, Letters I, BE Works, vol.25, p.451.

<sup>19</sup> 1736.3.22, Letters I, BE Works, vol.25, p.452.

<sup>20</sup> 1736.5.10, Letters I, BE Works, vol.25, pp.462-463.

<sup>21</sup> 1738.3.4, 『日記』 I, 山口徳夫訳, pp.223-224.

<sup>22</sup> M.シュミット『ジョン・ウェスレー伝』(新教出版社,1985年) p.278.

<sup>23</sup> 山中 弘『イギリス・メソディズム研究』(ヨルダン社,1990年) p.95.

と牧会を密接な関係におくウェスリの牧会論に基づく帰結だったのではないか。「説教と牧会の結び付きはつねに明確だった。ウェスレーは、回心者に対して回心後の注意深い霊的指導なしに放置することは、その魂を破滅に向かわせることであると理解していた」<sup>24</sup>。

その意味では、ウェスリの牧会は、ひとりの人間の回心から霊的成長まで、信仰者として世に生きる戦いを实际的に支援するトータルなものであった。ウェスリにあっては、伝道と切り離された牧会はなく、牧会と無縁の伝道もなかった。しかも、急速に増加する回心者の牧会をひとりだけでできるとは考えずに、信徒の牧会者に託していく。すなわち、ウェスリは、自分が直接関われる限界を認めつつ、人の霊的成長を支援できる牧会者を育てていた。

“An Address to the Clergy” (1756年)は、このようなメソジストの組織化がなされたあと、英国国教会との分離を巡る論争が激化する時期に書かれた。ウェスリはこの著作で、Methodist という用語は使わず、英国国教会との連続性を強調しつつ、非連続性もさりげなく語り、Christian という単語を用いてキリスト教会に広く呼びかけ、当時の牧会者たちへのケアの実践と自己吟味の勧めを、対話という方法で試みていると言えるのではないか。

### Ⅲ. 結びと今後の課題

ジョン・ウェスリにとって牧会者とは、神と人とを愛して仕えるために、『聖書』と「人間」との両方を知る必要のある存在として考えられていた。『聖書』と諸学問、礼儀と知識などを、二者択一でなく両者を結びつけるウェスリの牧会者論は、個人と教会、伝道と礼典など、一見方向の異なる両者を結び合わせる彼の神学の姿勢とも重なって見えてくる。

そして、一見方向の異なる両者を結び合わせる彼の神学的な特徴が形成された発端は、神であり人、人であり神、主でありしもべである御子を啓示する『聖書』と、多様性と多面性をもつ「人間」と、その両方向を知る必要性を説いた

---

<sup>24</sup> J.F.ホワイト『プロテスタント教会の礼拝 —その伝統と展開』(日本キリスト教団出版局,2005年) p.281.

父サミュエルからの影響によるのではないか。この点については、今後の研究課題である。

メソジストの流れを汲むウィリアム・ウィリモンは「牧師とは、パウロがそうだったように、福音のみならず、私たちの人生そのものを神の民と分かち合うことによって、神のために配慮しつつ働く存在である」<sup>25</sup>と述べる。ウェスリが呼びかけたように、牧会者とは他者をケアすると同時に、自身をも吟味し、牧会者同士で相互に対話し心を分かち合う交わりなどによる自身へのケアを必要とする存在ではないか。これは、現代の日本の教会と牧師にとって、具体的な展開が必要とされる課題である。

(日本フリーメソジスト東住吉キリスト教会 牧師,  
アジア神学大学院日本校(AGST/J) 牧会学博士課程在籍中)

---

<sup>25</sup> ウィリアム・ウィリモン, 『牧師 その神学と実践』(新教出版社,2007年),p.159